

当報告の内容は著者の著作物です。

東南アジアの文化と社会に関する講演会

Exchange Lecture on Culture and Society in Southeast Asia

主催 コタキナバル・リエゾンオフィス

共催 School of Social Science, University Malaysia Sabah, Kotakinabalu

日時 2012年2月16日(木) 14:00-17:00

場所 School of Social Sciences, University Malaysia Sabah(UMS)
Malaysia

Balinese Dance Drama Topeng Wali and its “Audience”

吉田ゆか子 (筑波大学)

本発表は、インドネシア共和国バリ州の各種儀礼において上演される仮面舞踊劇トペン・ワリの「観客」について考察した。トペンとは「仮面を用いたパフォーマンス」、ワリとは「儀礼」を意味する。人間のみならず、神々や地霊・悪霊に向けても上演されるこの演目は、いわゆる西洋の劇場とも、またバリの観光客向けの芸能上演とも異なった独特の関係性を観客との間に取り結んでいる。



左は儀礼でのトペン・ワリ上演であり、右はトペン・ワリの一部を抜き出して観光客向けに上演している光景である。演者は左右で同じであるが、二つは異なった形で人びとに眺められる。儀礼では、往々にして人びとは上演に無関心であり、上演を観たり観なかったりする。トペンの先行研究では語りの内容の分析が盛んであったが、観客がストーリーを端から端まで聴くことはむしろ稀であり、語り中心的研究視点には問題がある。本研究は、この人びとの無関心の背景を明らかにすると共に、このようなトペン・ワリが人びとにどのように作用するのかを考察した。

人びとは、トペンを観るために集まるのではない。彼らは、儀礼に参加するためにやってきて、偶然トペン・ワリの上演に出くわす。そのため彼らは必ずしもトペン・ワリに興味があるわけでもない。また彼らの多くは儀礼の場での様々な活動に忙しく、長時

間鑑賞に専念することができない。その上、上演は儀礼空間の人や音の流れにしばしば遮られ、上演物として非常に鑑賞しづらいものとなることもある。これらのことから人びとは、トペン・ワリを断片的に鑑賞する。

他方、(ある一定規模以上の) 儀礼にはトペン・ワリが必須であることから、その上演は極めて頻繁である。同じような内容が少しずつ形を変えつつ繰り返し語られる。この反復性は断片性を補うのみならず、語りの多様性や、観客側の自由な解釈と再構成を許している。また上演は、不可視の存在(神格や地霊・悪霊)を楽しませ、儀礼の成功に寄与する。そのため、その成果(儀礼の成就)はトペン・ワリを直接観たかどうかに関わらず、儀礼を開催した共同体全体によって享受される。

以上のことから、トペン・ワリや儀礼に深く関係する芸能を考察する上で(1) 舞踊や音楽や仮面といった非言語的要素に目をむけること(2) 一度の上演に分析対象を限らず、繰り返す上演の総体を考慮すること(3) 実際上演を鑑賞した人びとのみならず、儀礼を主催した共同体全体を考察対象とすること、の3点が必要となる。

なお、今回の報告では、報告者の調査の概要や、バリの宗教生活の特徴も紹介し、またトペン・ワリのビデオも上演した。